
世界を視る眼

御坂自由

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を視る眼

【Nコード】

N2194K

【作者名】

御坂自由

【あらすじ】

ちよつとヤバイ中二病患者の主人公が頑張っちゃうお話です

あらすじというより最初を説明すると『転生したい！、転生する時って車に高確率で轢かれてるよね、じゃあ俺も轢かれればいいんじゃない？』みたいな感じです。

ちなみに最強を超えたチートですのではつきり言っておきます。この作品はそこら辺にあるチート作品とは一線を画している！直視の魔眼？無限の剣製？これはそんなちやちなものじゃ断じてねえ！もつと恐ろしいものの片鱗を味わ（ryみたいな感じなのでご容赦く

ださい。現在はなのの世界に介入中。

ちよっ！神に殺された…（前書き）

ついカッとなってやった。

反省はしてない。

自分の文才のなさを後悔している。

あと、FF（ファンフィクション？）になると思います。

ちよっ！神に殺された…

あーだるい。

なんかもう……全部だるい。

え？何がだるいのかって？

そんなの決まってるだろ、俺の人生だよ！

俺の人生を簡単に明快に分かりやすく説明すると「面白くない」という言葉が一番合っているだろう。

朝早く起きて、学校に行き、学校から帰り、そして寝る。

そんな毎日が何一つ変わりなくやってくる日常。

あー考えただけでだるくなる。

ほら、あれだ、アニメの世界はあんなに面白そうなのに何で俺の人生こんなに面白くないんじやゴラアアアアアア！ってことだ。

まあ、ぶっちゃけると人生変えてーってことなんだよ。

ここで問題だが、この人生を変えるにはどうしたらいいのだろうか？

だが、この世界での人生はもうこりこりだ。できれば、違う世界に行ってみてー。

よくあるあれだ、転生ってやつのやり方だよ。

なんか車に跳ねられて、神様きて、他の世界逝ってもらいますよ的な？　そういうこと起きないかなーみたいな？

そういうハプニングもとい面白いことを望んでるんだよ！

はあ、マジで面白いこと起きないかなあ。

.....

やばい。

閃いた。

この世界から脱出する方法閃いちゃった。

え？教えて欲しい？

仕方ない、この俺様が教えてやろう！

どこかの世界に行きたい。

←

車に轢かれる。

←

神様と会う。

←

異世界にれつつごー！

上の表？ を見てもらうと分かるが異世界に行くにはこの四段階の工程が必要になってくる。

しかーし！

俺はまだ一段階目までしか突入してない！

つまり！

車に轢かれればいいわけだー！ ダダッ （注：効果音です）

よし、そうと決まれば轢かれてくるぜ！

ふっふっふっふ。

やはり俺の理論は正しかった。

予定通り神様に会えたんだからな。

「聞いているのですかっ！」

「すみませんしたー！」

……説教されてるけど。

「私がたまたまあなたを見ていたからよかったものを、見てなかったら死んでたんですよ！」

「うっ、すみません」

「あなたは自分の命を何だと思ってるのですか！」

「まあ、ゴミ？」

あ、やばい。地雷踏んだ。

「あ、あなたは……そこでずっと正座してなさいー！」

ごめん、一つ大切な事を忘れてたよ。

車に轢かれるのは『神の手違い』じゃないといけないんだって。

ホント不幸だ。

某幻想殺しのセリフを呟きながら考える。

てか、俺どうなるんだろう？

これ重要じゃね？

このまま死んだら俺、なんか損してるみたいだし。

まあ、俺が悪いんだけど。

「……はあ、分かりました。では、はい……はい、ありがとうございます
います」

しかも、さっきの神様携帯で電話してるし……電話してる……

「電話……！……！」

「うるさい！」

「すみません！」

てか、なんで神様が電話持ってるんだ！

念話でしろよ！

……なんか夢が潰された気分だ。

「あなたね……すみませんしたー！……ま、いいわ」

なんか謝ることに慣れた。

「ところであなた、神にならない？」

……は？

いやいや待て待て。

俺の耳が正常なら『紙にならない？』と聞こえたんだが。

さすがに自殺したから人間から紙にまでランクダウンなんて冗談じゃない。

「謹んで辞退させていただきます」
「つつ！」

ん？なんでそんなにびっくりしてるんだ？

まさか俺が喜んで受けるとでも思っていたのだろうか？

「あー分かったわ。じゃあ」

おー、やっと話が進む。

やっぱりチート能力もらって異世界に行かないと俺の憤りは収まらないね。

ここから俺のハッピーライフが始まるぜ！

「死んで」

え？

そう声を上げる間もなく。

体に剣が刺さった。

そして、感じる。

死を。

自分から生が失っていくのを感じていた。

「…おいおい……だるいぜ……また、死ぬの……かよ」

意識の途切れる直前、目の前に立つ自称神様を睨みながら、俺はそう呟いた。

<ぬかつたな>

<すみません、創造神様>

<まあよい。今ならまだ間に合うだろう。追撃を出せ>

<はい>

——世界が動き始めた——

——眼を持つ者を求めて——

ちよっ！神に殺された…（後書き）

G U D A G U D A だー！

これ読んでて面白い？

そんな訳で感想求む！

現状確認って大切じゃね？

そこは宇宙だった。

いや、宇宙のように何もない真っ白な空間だった。

そんな世界にずっといれば気が狂ってしまいそう。

なのにどこか温かいものを感じるような。

でも存在が消えてしまいそう。

そんな世界に彼、白木 空はいた。

その世界で彼は呟く。

何故かはわからない。

言わないといけない、そう思っただけ。

—— K o i t ? ξ τ ε ? λ ε ? o i π ? ρ τ ε ? θ α ε
? ν α ι α ν η T r u s t ε λ π ? δ ε ? σ α ? θ α
γ ? ν ε ι π ρ α γ μ α τ ι κ ? τ η τ α ? λ α τ α α ν
o i χ τ ? λ ω τ o ? ——

《すべてを視ろ さすれば扉は開かれん すべてを信じる さすれば

ば望みは叶うだろう》

空がそついうと世界が変わった。

真っ白な世界が急速に変わっていく。

根源の起源、神の誕降、世界の初め、宇宙の始まり、生命の誕生
——そして、根源の消滅

膨大な知識が頭の中に流れ込んでくる。

この世界も、自分も、神も、根源も、すべて視える。

ただ、視ただけで理解はできない。

そう、自分は器なのだから。

自分という器にこの膨大な情報は入らない。

それを理解しながらも、すべてを空は見終わった。

そして——泣いた。

世界に、自分に、神に、根源に向かってただ泣いた。

だが、空は泣いてることには気付かない。

今の自分は、ただの器なのだから。

泣いていることにも気付かず、空は宙を蹴った。

重力が無いかのように浮かび、前に進む。

そして、扉の前で止まった。

すると、その扉は何年も前から空を待っていたかのように滑らかな動きで扉が開く。

— N a s a i m a s e μ α ? π ? σ ω K u p ? o u μ α
? —

《御帰りなさいませ 我が主》

懐かしい声に迎えられ、空は扉をくぐった。

「……ん」

夢を見てた気がする。

でも、全然思い出せない。

夢での記憶が消されてるような、そんな感じ。

何故だろう？

まあ、いいか。

夢ってそういうモノだしな。

自分でも説明できないような感覚に囚われながらも、空は身を起
こそうとした――

「ッッ!？」

――が、起きあがれなかった。

(そういえば、俺刺されたんだっけ)

意外にも冷静に自分のことを判断する。

「ははっ」

車に轢かれに行き、神と会い、そして神に殺されたっていうのに
何でこんなに冷静なのだろう。

そう思うと無性に笑いが込み上げてきた。

だってこんな面白い体験なかなかできないんだぜ？

そんな体験をした俺ってラッキーボーイだなーとボーっとした頭
で考える。

俺は死んだのか？

本来は最初に考えるべきことを今更ながら考えた。

そして、反射的に刺された部分に手を俺はのばす。

「傷が……ない」

痛みは残っているが、刺された部分を見ると、確かに傷が無くなっていた。

何故だろう？　と思っただが、すぐにどうでもよくなった。

何故なら、面白くないからだ。

傷があれば、もう少し自分の状況に危機感や現実感が持てるだろう。

しかし、傷がなければ自分の身に起こった面白いことに現実感が帯びない。

それは、白木空として面白くなかった。

とりあえず現状確認しないとな、と体を持ち上げるが誰かの手がそれを遮った。

「ダメですよー、主様は今、絶対安静中なんですからねー」

手の主を見ると、そこには一人の少女がいた。

その女の子は青い髪に、優しそうなグリーンの目をしている。所謂、美少女ってやつだった。

それまで、リアルな女なんかつまらないと思っていた俺だが

(アニメの女の子みたいで可愛いな)

と不覚にも思ってしまった、顔を伏せる。

「……可愛い／＼」

再び女の子の方に目を向けると何故か照れていた。何故？

まあ、そんなことは置いといて、俺は現状を確認する。

「ごめん、君」

「はい、何でしょう主様」

何か変な言葉が聞こえた気がするが無視しよう。

「ここはどこかな？」

「ここは地球ですよ、主様」

地球か。

戻ってきたのか、あと、空耳が聞こえたな。

「それで、いまは何年の何時何分何秒かわかる？」

「この時間軸では2005年6月1日の13時45分37秒です、主様」

この時間軸と来たか、この少女もかなりの中二病患者らしいな。
それに、俺の記憶では2010年だったはずだが時間が戻ってる
な。

あと、何故主様？

「主様は主様だからですよ？」

何故に疑問形、それになんで俺の心が読めるんだ？

「それは私と主様の根源がリンクしてるからです」

根源？ リンク？

「つまり、俺と君は同調してるってことか？」

「はい、主様」

「俺の傷を治したのも？」

「はい、私です。主様」

どうやら、この女の子は事情をそれなりに知っているようだ。
少なくとも俺よりは。
でも、その前に。

「主様っていうのはやめてくれないかな」

「何故ですか？」

「名前で呼ばれないと気分が悪くなるんだ」

「では、空様でいいですか？」

様も付けないで、と言おうとしたがやめ、「いいよ」と代わりに言う。

何故かって？ 泣きそうな顔をしていたからに決まってるだろ。
どうしてかは知らないけど。

「とりあえず、俺の状況を説明してくれないかな。あ、あと名前教えて」

「名前……ですか？」

「うん」

「名前……ありません」

名前のない少女が俯いた。

どうして名前が無いのかは知らないけど『君』って呼ぶのは嫌だな。

名前って自分を表すものだし、自分の存在を明確にするものだから。

「じゃあ俺が付けるよ。いい？」

「はい、主……空様」

「はは……」

何か良い名前あるだろうか。
うーん、思いつかないな。

「……P?zε? 《根源》か。なら、ウラノスでいいかな?」
「Oupav?? 《天空》ですか。はい、私はこれからウラノスです。よろしく願いします、空様」

微笑みながら言うウラノス。
ちよつと安直だったかな、とも思ったが喜んでくれたならそれでいい。

「それで、俺の状況なんだけど説明してもらってもいいか」
「はい」

真剣な眼差しをウラノスに向ける。
彼女も真っ直ぐこちらを向いた。
そして、言った。

「あなたは真実アーシャの眼の正統後継者に選ばれました」

真実アーシャの眼。
それが何かはわからない。
だが、ただ一つ言えることがある。

——面白そうだ——

それだけで、俺はまだ見ぬ扉を開いてしまった。

現状確認って大切じゃね？（後書き）

二話です。

話がちよつと進みました。

真実の眼は……まあ、チートとだけ言っておこう！
あと、駄作だからって見捨てないで！

じっは地球！……りりなのだけど（前書き）

三話目投下……！

「ここは地球！……リリなのだけど

「なるほど、チートだな」

ウラノスから説明された^{アーシャ}真実の眼とは、俺の想像を遥かに超えたチート能力だった。

この能力を一言で表すなら『絶対者』とでも言うべきだろうか。それほどまでにこの能力は反則的だ。

それなりに弱点もあるが、神でもなければどうにもならないだろう。

「能力のことは分かった。後は何故、過去に飛ばされたのか説明してくれないか？」

「はい。まず、ここは空様の元いた世界ではありません」

「…待て、ここは地球じゃなかったのか？」

「地球です。ですが空様のいた地球とは違う、パラレルワールドの世界だと思ってください」

パラレルワールドか。

それは誤算だったな。まあ、俺にとっては嬉しい誤算だが。

「で、どんな世界なんだ？」

「少し待ってください情報を読みとります」

見たモノの情報を読みとる、これが能力のうちのひとつだ。

俺の能力である『真実の眼』はウラノスも一部が使えるようになっている。本人曰く、リンクしているから、だそうだ。

なら俺が自分でその能力を使えばいいのだが、俺はまだ使えないし、世界の情報は膨大なので今の俺が使うと脳が溶けるそうだ。

そんなウラノスは何者なのかというと「空様の下僕です」と言っていた。

「情報解析終わりました。ここはリリカルな世界のようにですね」

へー、リリカルね。

リリカルか。

「ちよっ！リリカルだって！？」

「はい」

マジかよ。

つまり、ここにはなのは達がいるのか。

これは俺念願の夢、原作ブレイクをしろと神様からのお告げかつ！

「よし行こう！さっそくI K Oー！」

「そ、空様！動かないでください！痛みはまだあるのですから！」

「ははっ、痛みなんて今の情報で吹っ飛んだZ E」

テンション上げてすぎてヤバイ。

今ならムーンサルトすらできそうな気がする！

そう思った瞬間、俺は走りだしていた。オタクとは思えないかなかのスピードだ。よし、この勢いならっ。

勢いよく二回転宙返りしながら体を捻る。このまま、いつけえー！

両足を地面に着ける直前、いけた！、と俺は思った。だが、この慢心がいけなかったんだと思う。

ぐきつ。

ぐああああああああああ！ 足首がああああああああ！

俺は足首を押さえてのた打ち回った。

思いつきのた打ち回り終わり、ウラノスの方をちらっと見てみる。

すると、肩を震わせていた。それはそうだろう。いきなり俺が奇怪な行動に出たんだ、怖かったのだろう。

俺が後悔に打ちひしがれていると

「あははははっ、くひっ、足首っぐきつて、く、あははははっ」

どうやらウラノスの笑いのつばに入っていたらしく、思いつ切り笑っていた。

よかった。ここで冷やかな言葉をかけられていたら、俺のライフは永遠に0だっただろう。

そんなバカなことをしてから、街（海鳴市）に着くと、俺は重要な事に気がついた。

「なあ」

「はい？」

「俺、お金持ってないんだけど」

「それなら心配いりません」

そして、満面の笑顔で言う。

「構成を弄ればお金なんて無限にできますから」

「犯罪だあああああ！ でも、まあいっか」

二つ目の能力。

それは情報を解析した物体の構成を弄るというものだ。

具体的に説明すると、石を純金にしたり、紙をお金に変えることもできる。

生活面でかなり役に立ちそうな能力だが、戦闘でもかなり役に立つ。

何故なら、魔法で攻撃してきたなら魔法を空気に変えればいいし、極端に言えば核で攻撃してきたら核を空気にすればいい。

だが、この能力は俺から離れると使えないらしいので、攻撃される前にデバイスを爆弾に変えたりはできない。（まだ使うことすらできないが）

だから俺は、この力を一種の創造能力の様なものだと考えている。完全に使いこなせればまさに『絶対者』だ。

よし、手始めに百万円いこうか。

「はい、空様」

空気をお金に変えたのか目の前に札束が出来上がる。

またテンションあがってきた。

いかんいかん、自重しないと。

とりあえず、今日は寝床を確保しないと。

最悪ネカフエという手もあるが、俺の容姿はまだ子供。通報される可能性もあるのでごめんこうむりたい。

となると、魔王かはやての家に居候が一番都合がいいだろう。原作キャラに会ってデメリットは何もないのだから。

それに6月4日、3日後には闇の書がはやての手に渡る。一番原作に絡みやすい方法ははやての近くにいることなんだが……どうしたのか。

まあ、いきなり出てきて乱入も面白そうだがw

今の時間なら、はやては図書館にでもいるだろう。

「ウラノス、海鳴市の図書館の位置を調べてくれ」

「はい……検索終了。道案内しますね、空様」
「たのむ」

こうして俺は寢床確保のために動き始めた。

「空君達はその座っててな。今お茶いれるから」
「ありがとうございます。はやてさん」

今俺達は、はやての家に来ている。

ここまでの経緯は……まあ、説明しなくてもわかるだろうが説明する。図書館に行く予想どおりはやてがいたので、どうやって接触するか考えていたところ、はやてが本を取ろうとして車椅子がこけそうになったのを俺が助けた。そしてはやてにお礼がしたいと家に招かれたのだ。

「ボーっとして空君どうしたん？」
「え？ ああ、なんでもないよ。それで……本当に素性もわからない俺達を泊めていいのか？」

はやての家に行くまでに大体の事情をはやてには話した。もちろん、異世界とか魔法の類については触れていない。

「ええんよ。この家には私しかおらんし……それに空君達はいいい人やる?」

「ははっ、そう信じてもらえると嬉しいよ」

嘘だ。

ウラノスはともかく、俺はいい人から最も遠い人種だろう。

何故なら、俺ははやてを利用するのだから。しかもその理由は『俺が楽しむため』ときている。

最悪の人間だ。

予定通り、その日ははやての家に厄介になることになり、俺の原作ブレイクの計画は進み始めた。

ここは地球！……リリなのだけど（後書き）

まさかのリリなのの世界！！

ふっ、予想外の展開に驚いたであろう！！

あと、のた打ち回り終わりって言いにくいね。

才能のなさに俺が泣いた！（前書き）

短いなあゝ

修行編です！

才能のなさに俺が泣いた！

俺の一番嫌いな言葉を知ってるか？

そう！ それは『努力』！

この世には努力しても無駄な事がたくさんある。

例えば受験だ。受験する人間は皆勉強し、努力する。

しかし！ 必ず、受かる人間と落ちる人間が出てくる。受かった人はいい、だが！ 落ちた人間はどうなる？

その人間に向かつて、目の前に立って、「もう一度受ければいいじゃない」なんてことを言えるか？

否だ！ 断じて否だ！ 言える人もいるかもしれないが、自分がその立場になればわかるだろう。

その落ちた人間も勉強したのに何故落ちる？ 勉強量が少なかったから？ 努力が足りなかったからか？

しかし、それは違う。

受験を左右しているのは『運』だ。
努力していたのに運が足りずに落ちてしまう。

そんな受験の時のほんの一瞬の運で、自分の努力は覆されてしまう。

そんな儚い努力なんて意味があるのか？

いや、努力しないと問題解けないよ、と思う人間がいるかもしれない。

だが、そんなものの結果の前では意味をなさない。

その人間は『落ちた』のだから。

どんな過程も結果の前では何も言えなくなってしまう。

だからこそ！ ゲームは素晴らしいとあえて言わせて貰おう！
ゲームは努力という経験値を目に表してくれる。

これは、過程すらも結果になったということなのだ！

そして、経験値は裏切らない。結果は裏切らない。

つまり、運によつて左右されない。

努力は裏切らないのだ。

それに比べて現実には

[illegible]

——こんなにも努力を裏切る。

ここまで前振りしたからには、俺が今やってることもわかるだろう。

そう！
修行だ！

真実の眼を持っているのはいいが、俺は全く使いこなせていない。解析速度はウラノスの十倍以上、構成速度はウラノスの百倍以上と悲惨な結果になっている。

こんなに遅ければいくら内容がチートでも意味がない。戦場に出たら死ねる。

そこで修行だ。

某正義の味方の修行方法と同じで、剣を解析、構成しようとして
いるのだからなかなか難しい。

およそ三時間ほど修行しているのだが、一向に成長がみられない。……才能がないのだろうか？

くっ、これだから現実はっ！！！！

「またも、才能という運が俺の目の前に立ちはだかるのかっ！
……そうだ、俺には才能がないんだ……諦めよう。」

「だ、大丈夫ですよ。才能がないのに後継者には選ばれませんからっ」

「……本当？」

「マジです！真剣と書いてマジと読むくらいマジです！」

「仕方ない、やるか。」

「でも、あと二日で闇の書が覚醒するのにこのままじゃ確実に間に合わない。」

「……そうだ！」

「ウラノス、ここの空間弄って時間を止めたりできるか？」

「できますよ」

「そうしてくれ、このままじゃ間に合わない」

「はい」

— A ν ? λ υ σ η τ ο υ χ ρ ? ν ο υ ν α σ τ α μ α τ
? σ ε ι τ ο χ ? ρ ο τ η ? α ν α σ υ γ κ ρ ? τ η σ η
? —

《空間を解析 時間停止に再構成》

「何となくだが……時間が止まったような気がする。」

「んじゃ、一気に修行しちまうか」
「はい」

——空間内時間で十年

「いくぞ」
「いつでもいいです」

俺の周りの空間を解析し……無重力に構成する。
そして——

「はあっっ!」
「」

——跳ぶ！

一瞬で距離を詰め、手に構成した剣で攻撃する。

ウラノスは、真正面から俺の剣を受け止めた。

何故避けないのか？

それは俺がウラノスの周りを空間固定したからだ。ウラノスも解析、再構成するが俺が何度も空間固定をすることにより、動けなくなる。

「強く…になりましたねっ」

「そりゃ、十年も修行したんだから……なっ」

拮抗していた剣同士を弾き、距離を取る。

俺達、構成を弄れる者同士が戦う場合、早く弄れる方が圧倒的有利になる。

そして、俺はこの十年でウラノスよりも少し早くなった。

「すぐ、勝負をつけさせてもらいます」

「はっ、出来るかな？」

なので、構成の遅いウラノスは短期決戦でしか勝てる可能性がない。

つまり、大技を放つしかないのだ。

「『約束された勝利の剣』……！」
エクスカリバー

ウラノスが構成したのは『約束された勝利の剣』。

ここに居る時に、俺が遊びで構成した宝具だ。ウラノスは『約束された勝利の剣』が気にいつているのか勝負でもよく使う。

なら――

「俺も宝具で対抗しねえとなあ。『天地乖離す開闢の星』……！」
エヌ・エリッシュ

笑いながら俺も構成した宝具の真名を叫ぶ。

魔力がぶつかり合い拮抗するが、徐々に俺の方が押し勝っていく。それもそうだろう。俺の魔力は無限、ウラノスの魔力はとんでもない量だが無限には程遠い。

つまり、どう転んでも俺が勝つて当然なのだ。

しばらくすると、俺の魔力の奔流がウラノスを飲み込んだが、出てきたウラノス自身には傷一つついてない。

たかが魔力の奔流など、構成を弄ればすぐ消えるのだから。

「あー、やっぱり負けちゃいましたね」

「そりゃそうだよ。構成速度も魔力も俺が勝ってるんだから」

「でも、勝ちたいんですよー」

「もう負けねーよ」

俺の構成速度がウラノスに勝ち始めたのは一年前ほどで、それまではいつもウラノスには負けていたのだ。
今までの恨みハラサデオクベシ力。

「とりあえず、ここ出ようか」

「そうですね。目標の私より強くなる、もクリアできましたし」

「最初は無理じゃね？って思ってたけど、意外とクリア出来ちゃったんだな」

「ふふつ、空様はやれば出来る子ですから」

「母親かよ」

まっ、俺も十分強くなつたし、リリなのの世界に再介入ってね。修行ばっかで疲れたからなあ、面白い介入したいな。
やっぱ、管理局潰しとかが妥当かな。

そんな構想（妄想？）に浸りながら、俺は心躍らせていた。

才能のなさに俺が泣いた！（後書き）

魔力が何故無限なのかは後々。

あと、解析して構成を分解とかはさすがに危険なので身内同士ではやりませんw

敵なら……やるかも。

人物紹介（前書き）

人物のちょっとしたプロフィールみたいなものです。

二人だけだけどw

人数が増えたら追加します

人物紹介

名前：白木空 しろぎそら

性別：男

年齢：16

身長：165?

体重：42?

趣味：ゲーム

特技：ゲームのボタン連打速度

好きなもの：ゲーム 面白いこと

嫌いなもの：現実

主な特徴：三度の飯より面白いことが大好き。普段はゲームをしている。

転生？ するまで世界が大っ嫌いだった。今でも面白くない世界は嫌い。

面白いものや人間には優しいが、つまらないものには興味も示さない。話しかけられても無視する。

容姿は美男子というより、美少女気味。だが、自分は気付いていない。髪も目も日本人同様黒で、面白くないから空は興味がない。というか自分に興味がない。

能力：真実の眼 アーンシャ

根源への鍵。

空が今できるのは解析と構成。

解析は見たものの情報を得る能力。

構成は『存在を弄る』ことができる。空が弄ることのできる範囲は10m。修行しだいで伸びると考えられる。

補足だが、宝具を構成するには魔力は使わないが真名を解放する時には使った方がよい。魔力を込めた方が威力が上がる。

チート。

また、他にも能力があるのかは不明。

F a t e 風能力値

【筋力】 E 【魔力】 E X

【耐久】 E X 【幸運】 C

【敏捷】 A 【宝具】 E X

名前：ウラノス

性別：女

年齢：？？？

身長：155 ～ 160 ？

体重：？？？

3S：？？？

趣味：ないと思われる

特技：ないと思われる

好きなもの：空 カレー

嫌いなもの：空の邪魔をするもの

主な特徴：空至上主義。

空が目覚めるとそばに居た少女。空はウラノスのことを完全に理解していない。

性格は基本優しい。特に空に。知らない人には……多分興味がない。

見た目は本文にも書いていたように青い髪で緑色の眼をした美少女。

空のことが好き？　かもしれない。
あと、空とはリンクしている。

能力：？？？

空と同じように真実の眼を使える。本人曰くリンクしているからで、劣化版らしい。

能力があるのかは分からないが、それでも十分にチートである。

【筋力】	D	【魔力】	A +
【耐久】	EX	【幸運】	C
【敏捷】	A	【宝具】	EX

創造神

一瞬出てきた人物。おそらく神の最高位だと思われる。
真実の眼を狙っている？

能力：？？？

人物紹介（後書き）

次から才り展開開始！

闇の書覚醒！

六月四日午前零時現在。

おそらく、今、はやての部屋で闇の書が覚醒をはたしているだろう。

そして、終わった頃に俺ははやての部屋に向かった。

「終わったか。ヴォルケンリッター」

「なっ！？」

部屋の扉を開け、声をかけるとヴォルケンリッター達が驚く。しかし、すぐに敵対行動を取り、襲いかかってきた。

降り注いだ剣をこちらも構成した剣で防ぎ、言い放つ。

「血の気が多いな、『烈火の将』シグナム」

「何故その名を知っている！？」

「なら剣を引け、こちらも敵対する意思はない。そうしたら教えてやる」

「ふざけるなっ！」

剣が交錯し火花が散る。

互いに距離を取ったところで空が再び言い放つ。

「ここでやってもいいが……はやてがどうなっても知らんぞ」

「くっ！貴様あゝ！何が目的だ！」

「目的か……あえて言うなら、管理局を潰すことだな」

「それと何故私たちが関係する！？」

「その手伝いをしてもらいたいのだよ、君達、ヴォルケンリッターには」

殺る気満々なシグナム達を見渡しながら、諭すように言うが、

「なんで私達がそんなことしなきゃならねーんだよ！」

ヴィータが今にも噛みつかんばかりに吠えた。

「やれやれ、君達もいずれ気付くだろうがはやての足は闇の書が引き起こしていることだ」

「っ！」

「そして、それを治す方法は闇の書を完成させるしかない。しかし、闇の書が完成すればはやては……死ぬ」

「どういうことだ！」

「なに、簡単な事さ。闇の書には致命的なバグがある。それゆえに暴走し、死ぬ。それだけだ」

淡々と空は事実を述べていくが、シグナム達は信じられないとい

った様子で狼狽している。

しかし、闇の書と繋がっているからこそ信じられないが嘘だとも言いきれないのだろう。

（チェックメイトだな）

空は内心で笑いながら詰みへの一手に手をかけた。

「そこで、取引しないか？」

「取引？」

「そのバグを俺が直す。その代わりにお前達は俺に手を貸せ」

「直せるのか！？」

「ああ、条件を飲めば、だがな」

シグナム達は相談しているようだが、空は必ず条件を飲むと踏んでいた。

人は不安があるときに何かに頼ろうとする。

それは、闇の書のプログラムであるシグナム達も例外ではない。

そこに、不安を消してくれる『俺』が現れたのだ。この好条件を飲まない訳がない。

空は高笑いしたい気持ちを押さえながら、返答を待つ。

「いいだろう、その条件を飲もう」

相談を終えたシグナムが代表として答えた。

「物分かりがよくて助かるよ。じゃあ、俺はもう寝るから。あ、今後のことは起きたら話すよ、もう眠い」
「わかった」

欠伸を堪えながら、そう言い残し部屋を出る。
さて、第一条件はクリアしたか……あとは……

「くくく、面白くなってきた」

そう呟き、空は寢床に潜り込んだ。

朝というより昼頃に俺が起きると、リビングにはウラノスとシグナムとヴィータ、犬？形態のザフィーラがくつろいでいた。
ウラノスとシグナム達は、別段問題もなく和やかな雰囲気だ。

「おはようございます、空殿」

「おはよ、って俺、名前教えたっけ？」

昨日は交渉という名の俺の思惑しかなかったはずだが。
まっいいか、どうせウラノスだろ。

「いえ、ウラノス殿に教えてもらいました。あと、主から伝言です、
ご飯は冷蔵庫に入っている、と」
「おっけー、サンキュ、シグナム」

お礼を言いながら冷蔵庫に向かう。
どれどれ、おっ、カレーか。

そういえばカレーには大分お世話になったな。修行中によく食べたのもカレーだし。ウラノスが一番好きなのもカレーだったしな。

「んで、はやてはどこに？」

「主は図書館に行かれました」

「そっか。なら、今のうちに闇の書についてちょっと説明しておくか」

「はい」

俺はカレーを電子レンジに入れながら話します。

「じゃあ、お前らがどのくらい闇の書について知っているか聞きた
いんだが」

「はい。私の知る限り闇の書は、全666ページを埋めれば強大な力を得られる、そして主が死ねば転生する……この程度でしょうか」
「まず間違いを正すと、闇の書は本来の名前じゃない。夜天の書が正式名称だ。そして、夜天の書の本来の使い方は……」

レンジし終わったカレーを取りだし、テーブルに置く。

「まあ、それはどっちでもいいか。で、本題なんだが、バグを直すには闇の書の起動が安定状態に入っていないといけない。つまり、管理人格が起動してるくらいだな」

「……昨日から思っていたのですが、何故空はそんなに知っているのです？」

「あれ？ウラノス、説明してなかったの？」

ウラノスに顔を向けると、忘れてました、と舌を出して苦笑いしている。可愛いから許そう。
めんどいけど説明するか。

「俺の眼はちよつと特殊なんだ。真実の眼アーシャって言うんだけど、その能力が解析と構成なんだ。解析は見たモノすべての情報を得ることができるとか、まあ、すべてを理解する目だと思ってくれていい」
「なるほど。それで、バグを」

「そゆこと。構成は存在を弄る能力、簡単に言うると作り直したり壊したりできる能力だな。その構成で、闇の書を夜天の書に戻す」

実際はバグを消すだけだが言う必要はないだろう。

それに、安定状態に入ってる必要はない。つまり、嘘だ。今からでも直すことは可能だろう。

でも、消してしまうと管理局との交戦がなくなってしまう。それは、面白くない。

だから、安定状態という嘘を信じさせる。

別に、俺ははやてが苦しもうと関係ない。だって他人なんだから。でも、寝床を提供してくれたから治す、それだけだ。

「ありがとう、空殿。半信半疑だったが…主はやてを頼みます」

「いやいや、こっちも取引したんだから当然さ。あ、でも、一つお願いがあるんだがいいか？」

「私にできることなら何でもしよう」

「じゃあ、俺に剣を教えてくれないか？」

「たやすいことだ、了承しよう」

修行でも剣を使っていたが、それは一撃を入れれば勝ちという勝負だったから機能しており、打ち合いになれば意味をなさなくなる。だからこそ、剣術指南だ。都合良く、一流の剣士がいるのだから教えてもらって損はないだろう。

それに、この真実の眼を使うと魔法程度では相手にならない。

それでは面白くないので、剣術、となったのだ。

「では、庭に移動しましょうか」

「え？もっ？」

「当たり前でしょう。行きますよ、空殿」

「……わかった。あと、殿はやめてくれ」

「わかりました、空」

うつかり、シグナムがバトルマニアだっ
てこと忘れてたな。
まあ、なるようになるだろ。

そう思い、俺も庭に移動した。

闇の書覚醒！（後書き）

空は戦いの時と平常時では口調が違います。

おそらく、戦いになると厨二病が悪化しているのでしょうw

蒐集開始！（前書き）

今回はシリアス？です

蒐集開始！

朝というより昼頃に俺が起きると、リビングにはウラノスとシグナムとヴィータ、犬？形態のザフィーラがくつろいでいた。

ウラノスとシグナム達は、別段問題もなく和やかな雰囲気だ。

「おはようございます、空殿」

「おはよ、って俺、名前教えたっけ？」

昨日は交渉という名の俺の思惑しかなかったはずだが。
まっいいか、どうせウラノスだろ。

「いえ、ウラノス殿に教えてもらいました。あと、主から伝言です、ご飯は冷蔵庫に入っている、と」

「おっけー、サンキュ、シグナム」

お礼を言いながら冷蔵庫に向かう。
どれどれ、おっ、カレーか。

そういえばカレーには大分お世話になったな。修行中によく食べてたのもカレーだし。ウラノスが一番好きなのもカレーだったしな。

「んで、はやてはどこに？」

「主は図書館に行かれました」

「そっか。なら、今のうちに闇の書についてちょっと説明しておくか」

「はい」

俺はカレーを電子レンジに入れながら話します。

「じゃあ、お前らがどのくらい闇の書について知っているか聞きたいんだが」

「はい。私の知る限り闇の書は、全666ページを埋めれば強大な力を得られる、そして主が死ねば転生する……この程度でしょうか」

「まず間違いを正すと、闇の書は本来の名前じゃない。夜天の書が正式名称だ。そして、夜天の書の本来の使い方は……」

レンジし終わったカレーを取りだし、テーブルに置く。

「まあ、それはどっちでもいいか。で、本題なんだが、バグを直すには闇の書の起動が安定状態に入っていないといけない。つまり、管理人格が起動してくるくらいだな」

「……昨日から思っていたのですが、何故空はそんなに知っているのです？」

「あれ？ウラノス、説明してなかったの？」

ウラノスに顔を向けると、忘れてました、と舌を出して苦笑いし

ている。可愛いから許そう。
めんどいけど説明するか。

「俺の眼はちよつと特殊なんだ。真実アインザの眼って言うんだけど、その能力が解析と構成なんだ。解析は見たモノすべての情報を得ることができるとか、まあ、すべてを理解する目だと思ってくれていい」
「なるほど。それで、バグを」
「そゆこと。構成は存在を弄る能力、簡単に言うると作り直したり壊したりできる能力だな。その構成で、闇の書を夜天の書に戻す」

実際はバグを消すだけだが言う必要はないだろう。

それに、安定状態に入ってる必要はない。つまり、嘘だ。今からでも直すことは可能だろう。

でも、消してしまうと管理局との交戦がなくなってしまう。それは、面白くない。

だから、安定状態という嘘を信じさせる。

別に、俺ははやてが苦しもうと関係ない。だって他人なんだから。でも、寝床を提供してくれたから治す、それだけだ。

「ありがとう、空殿。半信半疑だったけど主はやてを頼みます」
「いやいや、こつちも取引したんだから当然さ。あ、でも、一つお願いがあるんだがいいか？」

「私にできることなら何でもしよう」

「じゃあ、俺に剣を教えてくれないか？」

「たやすいことだ、了承しよう」

修行でも剣を使っていたが、それは一撃を入れれば勝ちという勝負だったから機能しており、打ち合いになれば意味をなさなくなる。だからこそ、剣術指南だ。都合良く、一流の剣士がいるのだから教えてもらって損はないだろう。

それに、この真実の眼を使うと魔法程度では相手にならない。それでは面白くないので、剣術、となったのだ。

「では、庭に移動しましょうか」

「え？もう？」

「当たり前でしょう。行きますよ、空殿」

「……わかった。あと、殿はやめてくれ」

「わかりました、空」

うつかり、シグナムがバトルマニアだってこと忘れてたな。まあ、なるようになるだろ。

そう思い、俺も庭に移動した。

「空は、剣術は初心者だと思っただけなのか？」

「そう思ってくれて構わない。もちろん、真実の眼は使わんよ」

俺は言いながら、手に構成した木刀をシグナムに投げ渡す。
華麗にキャッチした木刀を、シグナムが何故か驚いた風に見つめていた。

「ん？ どこか変か？」

「いや、何も無いところから出てきたな、と」

「ああ、空気の構成を変えて作ったただけだ。便利だろ」

笑いながら、自分用にもう一本構成する。

補足だが、俺はまだこの目で木刀を見たことはない。だが、視たことはある。根源のデータベースにあるものを視れば大体のモノは作れるのだ。ただ、データベースにもランクがあり、俺はランク7までの3にしか到達していない。しかし、それでも膨大な量の情報が内包されているので大概の情報はそこにある。木刀もその一部と言っ訳だ。

「ふむ、鍛練だがまずはどの程度できるのか見させてもらおう」
「わかった。じゃあ……行くぞ！」

「——いつてえ」

「すみません、空」

「いいよ、お願いしたのは俺なんだから」

鍛練の結果は、まあ、言わなくてもわかるだろう。

だが、一太刀も入れられないのはさすがに傷ついた。それなりに、どう動けばいいのかはわかっていのに当たる当たる、面白いくらいシグナムの攻撃が当たるのだ。

一流と二流にもなっていない者の差を見せつけられた。

「空には、才がないわけではありません。むしろ、良いものを持っていると言っていていいでしょう。しかし、そこは経験と練習が足りない。なので、これから磨けば強くなるでしょう」

「よかったね、空君」

「ああ、はやて、今日のご飯は？」

「今日はね——」

そう言っただけそうにはやてが微笑む。

その様子にシグナム達も頬を緩ませた。そして決意を新たにす。

（絶対助け出して見せます。主はやて）

確かに、今彼女達は幸せであつた。

何故ならはやては他の主とは違い、家族のように暖かく、道具のように使わないのだから。

そして、はやてはシグナム達がいてくれることに幸せを感じていたのだから。

それに、空やウラノスも居る。

彼らもはやてと同じように温かく、家族のように接してくれる。
それだけで、彼女らは満足なのに。

幸せな時間は長くは続かない。
望む者の手によって導かれ、望まざる者たちが気付かないのだから。

そう、運命なのだから――

闇の書がはやての手に渡り、早二ヶ月。
空が言うにはそろそろ蒐集を始めなければ危険になる、とのことだった。

そこで、私達は蒐集を開始し、今は次元世界での大型野生生物のリンカーコア蒐集に励んでいる。
その他にも魔道士から蒐集もするが、それほど美味しい相手ではないので大型野生生物中心になったのだ。

「蒐集開始」

今倒した大型生物のリンカーコアを吸収する。

「蒐集完了。くっ、三ページか。少ないな」

「こいつら体力だけはあるからな。それとも、一気に管理局の根こそぎ貰つか？」

軽く冗談で空が言うが、それもいいか、とたまに思ってしまう。
管理局は厄介な相手だが、負けはないと確信している。

それは、一度見た空の能力があるからなのだが……
それに、空の目的は管理局を潰すこと、なので取引も一気に終わらせることができる。

一石二鳥とは正にこのことだ。

「ああ、そういえば、ヴィータが探してるっていう奴は見つかったのか？」

「いや、今日見つからなければもういいと言ってある」

「見つかるといいな」

私と空が新しい獲物を探して飛び立とうとする時、シャマルから
念話で通信があった。

（シグナム、空君、聞こえる？）

（ああ、なんだ？）

（ヴィータちゃんが今まで探してた大きな魔力反応の主を見つけた
みたいなの。今はその子と交戦中なんだけど、管理局に見つかちゃ
って……。だから、集まって欲しいんだけど）

（了解した。そちらに座標を送る）

（分かったわ。転移するから動かないでね）

念話を切ると、足元に転移魔法が現れた。

「シグナム、俺は一足先に行ってるぜ。さっさと、ヴィータを助けてくる」

「ああ、頼む」

そう言い残すと空は虚空に消える。

転移とも言えない技を使い、次元移動する空。

「……本当に規格外なやつだな」

そう私は呟き、転移の完了を待った。

「はい、そこまでにしてくれるかな」

俺が一足先に助けに戻ると、案の定ヴィータはフェイトに捕まっていた。

ここまでは俺の知っている話し通りに進んでいることを再確認しながら、フェイトに剣を向ける。

「くっ、どこから!？」

「そりゃ、そこからでしょ」

シグナムに鍛えられた剣術でフェイトに切りかかるが、やはり防がれた。

二カ月程度で渡り合えても驚くが、それなりには通用しているようで拮抗はしている。いきなり現れた動揺の効果も有ってだろう。

「ヴィータ、早くやれ」

「わかってるよ!そんなこと!」

不機嫌になりながらもバインドを解き、戦線にヴィータが復帰する。

それを見た淫獣が、なのはに“ラウンドガーダー・エクステンド”という防御と肉体・魔力の回復を同時に行う結界の中に入れフェイトの救援に向かう。

それとほぼ同時に、シグナムも転移し終わったようでこちらにやってきた。

「さて、シグナム、コイツを頼む。剣術ではまだ対等には無理だ。俺はあの白い方に行く」

「ふむ、わかった」

剣をぶつけ合いながら指示を飛ばす。
そして――

「――少し離れてもらおうか。壊れた幻想」
ブローケンファンタズム

剣を投げつけ、爆発させる。

これで、シグナムと入れ替わる時間が取れた。

（シャマル、俺が隙を作るから白い奴のリンカーコアを）
（わかったわ）

なのはに近づきながら、結界を解析していく。

（脆いな、構成を分解）

「え！？結界が！？」

結界が破壊され、怪我をしながらもなのはは、俺にレイジングハ
ート突きつけてくる。

そして、それを見てどうしようもなく俺は苛立つ。

何かなのはを戦わせるのか、どうして戦うのか、そして――

「反応が悪いな、戦場では気を抜いたものから死んでいく。君はもう一度死んでるぞ」

「君は……それよりも何でこんなことするの！？話を聞かせて！？」

——こんな甘い考えを持っていることに、どうしようもなく俺は苛立つ。

「……一度、自分を見つめ直せ。シャル！」

俺が叫ぶと、なのはの体からシャルの腕が現れる。

そして、その手の中にはリンカーコアが握られていた。

なのはの危険を感じ取っていたフェイト達だが、シグナム達に邪魔され辿り着けない。

なのはの魔力が膨大だったため少々時間がかかったが、蒐集が終わった。

（蒐集が終わったわ）

（よし、目的は達成した。一旦解散して予定の場所に集合な。じゃあ、散！）

（（了解）（））

俺の指示に従い、各自散り始めるシグナム達。

それを見送りながら、俺は手に一つの剣を構成する。

そして、なのはに剣を投げつけた。

「何するんですかつ！」

が、フェイトに防がれた。

フェイトは友人のなのはを殺されそうになり怒っているようだが、俺の心は穏やかだった。

「何って、殺そうとしただけだが」

「っ！？そんなことして何も思わないの！？」

「思わないね。邪魔なものは殺す、当然だろう。それとも、君達は自分は死なないとも思っているのか？これは戦いだ。命の奪い合いなんだよ。そんな甘い考え方なら出てくるな」

そう言い残し去ろうとしたが、言い忘れたことを思い出し、もう一度フェイトに向き直る。

「あと、俺達は闇の書の関係者だ」

「闇の……書？」

「ロストログアだ。管理局にでも聞けば懇切丁寧に教えてくれるだろう。ただ、これ以上戦場に出てくれば俺はお前達を――」

息を吸い込み、出来るだけの殺気を込め言い放つ。

「――殺す」

その迫力にフェイト達は動けない。

否、何も考えられない。

ただ、この男――白木空――に恐怖した。

蒐集開始！（後書き）

空「一つ言いたいんだがいいか」

作者「ん？何だ？」

空「俺完璧に悪役じゃね？」

作者「当たり前だろ、最初から管理局潰すって言ってるし」

空「でも、気絶したなのはにとどめを刺す主人公ってまだ見たことないんだけど」

作者「良かったじゃないか、世界初だぞ」

空「世界初なのに全然嬉しくねえ！！」

作者「でも、今迷ってるんだよな」

空「何に？」

作者「お前が誰殺すか」

空「迷って欲しくない！てか、原作は魔法少女アニメなんだから、殺しはちよつと……」

作者「いや、そうなんだけど、いくらなんでも甘すぎない？」

空「例えば？」

作者「例えばヴィヴィオ戦とか」

空「あゝ、ヴィヴィオなんで非殺傷設定だった、ってことか」

作者「そう。あれ絶対ヴィヴィオの勝ちだろw」

空「まあ、仕方ないんじゃない？なのは主人公だし」

作者「主人公補正か。でもあれはないw」

空「次回予告！『お前を殺す』だ！あれ？俺マジで殺すの？」

作者「という訳でお楽しみに」

空「おい待てって！」

お前を殺す（前書き）

注意！注意！！注意！！！！

なのは好きは引き返すべし！

お前を殺す

「魔力蓄積型のロストログア。魔導師の魔力の根源となるリンカーコアを食って、ページを増やしていく。全ページである666ページを埋めるとその魔力を媒介にして真の力、次元干渉レベルの力を発揮する。本体が破壊されるか所有者が死ぬかするとページが白紙に戻って別の世界で再生する。様々な世界を渡り歩き、自ら生み出した守護者に守られ魔力を食って永遠を生きる。破壊しても何回も再生する。停止することができない危険な魔導書。それが闇の書だ」

なのはが襲われた翌日、この事件は第一級搜索指定がされている最上級に危険なロストログア“闇の書”が関わっていると判明し、時空管理局はようやく本腰を入れてきた。

そして、必然的に今年の春先に起こったPT事件を解決し、優秀な業績を上げているアースラがこの事件を担当することになったのだ。

だが、アースラは整備中なので司令部がなのはの近所になり、今はその司令部で闇の書についてクロノが説明していた。

「守護者ってあの赤い子やフェイトちゃんとアルフさんが戦ってた人のこと？」

「ああ、そうだ。そして、君を殺そうとしたのがおそらく闇の書の主と見ていいだろう」

殺す。

その言葉を聞いた瞬間、フェイトの体が強張ったが平静を装って質問する。

「そ、そういえば、あの人たちの魔法って何か変じゃなかった？」

弾丸の様なものを取りこんだ瞬間から、爆発的に魔力が上がっていた。

その奇妙な技によって、なのはもフェイトもやられたのだ。

「ああ、それはおそらくベルカ式だ」

「『ベルカ式？』」

「その昔、ミッド式と魔法勢力を二分した魔法体系だよ。遠距離や広範囲攻撃を度外視して対人戦闘に特化した魔法。最大の特徴は、デバイスに組み込まれたカードリッジシステムって呼ばれる武装。儀式で圧縮した魔力を込めた弾丸をデバイスに組み込んで瞬間的に爆発的な破壊力を得るんだ」

なのは達の疑問に答えるようにユーノが説明した。

その説明でベルカ式は理解したが、それとは他に一つ疑問が浮かんでくる。

「じゃあ、あの男の人の魔法は？魔法陣も何も展開してなかったよ」

「あの男については何もわかってない。おそらく魔道士だとは思うんだが詳細は不明だ。何かあれば連絡するから今日はもう解散だ。各自、休んでくれ」

クロノが解散を告げ、なのは達は部屋を出て行ったが、クロノはその場で闇の書について黙々と調べていた。

11年前、「闇の書」の輸送中に、クロノの父親“クライド・ハラウン”が指揮していた艦の制御を闇の書に奪われた。クライドは自分の艦の破壊を自ら提案し、やむなくその提案通りに艦は破壊されクライドは殉職した。

この事件からクロノの心に大きな影が落とされたのだ。

そして、昨日の事件。

未遂とはいえ、なのはは殺されかけた。

もう、あんな悲劇は繰り返させないと管理局に入ったのに、自分は何もできずに見ているしか出来なかった。

そんなやりきれない思いを奮起に変え、クロノはただ、調べ続けた。

時間は戻り、なのは襲撃の少し後。

集合場所に向かうため、空は空中を飛んでいた。

そして、飛びながら独り呟く。

「なんで俺、剣投げたんだろ？」

純粹な疑問だった。

あそこで、なのはを殺せば大きく原作から外れることは確定していた。

だが、自分の中にそんな予定はない。

まあ、後か今の違いだが……今は殺す気がなかったのに殺そうとした。

「苛立つてたからか？」

アニメを見ながらも思っていたことだが、なのはは甘すぎる。
お話なんかじゃ人の価値観は変わらない。

それはそうだろう。

人は愚かだ。

そして、愚か故に繰り返す。

戦争も犯罪も、人は何度も繰り返してきた。

繰り返してきたのに、身を持って体感してきたのに止められない。

そんな、人間という種が体感もしないお話なんかで止められるはずがない。

それを、人の本質を理解していないのはが平然とそれを謳っていることに、空はどうしようもなく苛立った。

甘すぎて、血の匂いもしないのはが、人を信じていることに苛

立つたのだ。

そんな自分に、空は苦笑する。

「俺がまだ、人間なんかに興味があつたなんてな」

それは苦笑というより、自分に向けての嘲笑だった。

空は、自分が歪んでいると自覚している。

自分に絶望し、人間に絶望し、果てには世界に絶望しているのだから当然だろう。

その白木空が、なのはに興味を持つ。

最初はアニメの人物だからか、と思っていたが違ったようだ。

自分は、甘ちゃんなのはにどうしようもない怒りを持っている。

人間として。

「俺は……絶望したくないのか」

空はそう、虚空に向けて呟いた。

なのはを襲撃してから一週間。

シグナム達は順調に蒐集を進めている。

まだなのは達はリンカーコアが回復していないのか戦場には出ていないので、問題なく蒐集できているようだ。

その結果、シグナム達は後30ページ程で管理人格を起動できるので喜んでいた。

俺は今、家で鍛練中だ。

最近は蒐集に忙しく、シグナムの時間が取れないので自主練ばかりになっている。

こんなことなら嘘付くんじゃなかったと後悔気味だが、原作が早まって退屈しないから良しとしている。

一通りシグナムに教えてもらった型を終え、汗を流そうと風呂に向かった時、シャルから念話があった。

（ごめん、空君。ヴィータちゃん達が結界内に閉じ込められちゃったから、助けに来てくれない？）

（いいけど、あいつらだけで大丈夫じゃないのか？）

俺はそれほどヴィータ達を弱いとは見ていない。

今のなのは程度なら苦戦はしても負けはないだろう。

（今日は、はやてちゃんのお友達が来るんですよ）

あー、そういえばそんな話があったような。

たしか、すずか……だっけ。

（だから、早めに切り上げたいんです。頼めますか？）

（おっけ、おっけ。んじゃ、そっち行くから座標くれない？）

（はい）

……よし、行くか。

— Δ ι α μ ρ φ ω σ η σ υ ν τ ο ν ? σ ε ι τ η ν α ν
α σ υ γ κ ρ ? τ η σ η μ ε τ ? τ η ν α π ο σ υ ν τ ε θ
ε ? α ν ? λ υ σ η σ ? μ α τ ο ? —

《体を解析 構成分解後 座標に再構成》

この技は真実の眼を自分に使う応用技だ。

自分の体を解析し、存在原子レベルまで分解する。そして、好きなところで再構成するという離れ業。

だが、危険度も高い。

失敗すれば再構成できずに死亡、なんてのも有りうる。

それなりに使いこなせているからこそ可能な技だ。

「何やってんだ、シャマル」

結界近くに移動すると、シャマルがクロノに後ろを取られて動けなくなっていた。

原作通りにいくと仮面の男、猫姉妹が現れて助けるのだが……ど

うやら居ないみたいだな。
助けるか。

「よそ見してつと死ぬぜえ！」
「なっ！？」

手に剣を構成して切りかかるが避けられる。
まあ、予定通りだが。

「私に触れぬ（メリ・メ・タンゲレ）」

さらに構成した深紅の布——マグダラの聖骸布——が意思を持つ
たようにクロノに襲いかかった。
クロノはデバイスで振り払おうとするが出来るはずもない。
すぐに布はクロノを拘束した。

「無駄だ。その布は男には絶対の拘束力を持っているからな。あと
シヤマル、こいつのリンカーコア取っとけよ。うまくいけば今日で
はやてを解放できる」

「すみません、空君」

「いいって、今から結界を破壊する、闇の書の準備もしとけ。そい
つと黄色い奴ともう一人の男を蒐集すれば30ページくらいいくだ
る？」

「はい、いきそうですね」

さて、真実の眼を使うのもめんどくさいし、破戒すべき全ての符ルールブレイカーで壊すか。

（シグナム、ヴィータ、ザフィーラ。黄色い奴とその淫…じゃなくて男の子からリンカーコアを取るぞ。ヴィータは男の方に行ってくれ、その白いのは俺がやる）

（なんで空と変わんなきゃならないんだよ！）

（今日の蒐集で闇の書を直せるからだ。そいつと戦っても意味はない）

（ちっ！分かったよ）

（じゃあ各自、戦闘不能にでもしてくれ）

（（了解））

念話で指示を飛ばしながら結界を壊し、なのはの所に飛ぶ。

さて、どうやってあの甘ちゃんなのはを痛めつけようか。

「どうして、闇の書を完成させようとするのか話を聞かせて！私たちにも手伝えることがあるかもしれないよ！」

「お前に話すことはない。それよりも忠告したはずだが、戦場に出てくれれば殺すと」

「で、でも！」

また、お話か。

いい加減にして欲しいな。そんなものじゃ何も変えられはしないのに。

「今からでも遅くない。デバイスを捨て、普通の少女に戻れ。お前が戦う理由がどこにある」

「理由ならあります。私は友達を、みんなを守りたい！」

苛立つ。

「君はその意味を理解しているのか？もし、敵を殺さないといけなくなったらどうする？」

「そんなこと——」

苛立つ！

「そんなことにはさせないと誰が言える！おまえは神じゃない！覚悟もないのに戦うな！」

「っ！」

誰も殺さないなんて、誰も言えない。

戦場に出れば自分という人間は戦闘単位になり、殺されても文句は言えないし、殺すことを気に病む必要はない。

だが、それは殺してもいい理由では断じてない。

殺すのは罪だ。

戦場に出るには、その罪を背負う覚悟と責任が必要がある。

それが無ければ、そいつはただの人殺しだ。

「お前にその覚悟はあるのか？高町なのは？」

俺は剣を――人を殺すための道具を、少女に突き付けた。

「わ、私はっ……」

人を殺すことなんて私は出来るの？

覚悟なんて私にあるの？

責任なんて私は取れるの？

私はただ、みんなと一緒に居たくて、そのために戦ってきた。
みんなに好かれたくて……

それはいけないことなの？

私は嫌われたくない。

みんなに必要とされたい。

そのために明るくて、正義感の強い少女を演じてきた。

それはいけないことなの？
いけないの？

何でダメなの？
どうして？

わからない。
わからないよ。

ねえ、誰か教えてよ。

「私……はっ……」

「私……はっ……」

答えは出なかったのか。
それもいいさ。

今、楽にしてやる。

「永遠に眠れ、高町なのは」

そう宣告し――

——俺は高町なのはを、殺した。

お前を殺す（後書き）

作者「……やっちゃった」

空「……ああ」

作者「どうする？」

空「どうするって、考えてないのか？」

作者「いや、考えてはいるんだけどかなり重い」

空「いや、もう十分重いから」

作者「……だね」

空「……とりあえず、この世界を見る眼は続きます」

作者「はい、暗いけど頑張りますのでよろしくお願いします」

空「なんか喋る気分じゃないや」

作者「……僕も」

空「なので、次回でお会いしましょう。ではノシ」

己のエロ（前書き）

短いです！

ですが、分岐点なので読んでやってください！

己の江戸

「なのは！」

「フェイト……ト……ちゃん」

フェイトの呼びかけになのはが答えるが、それはあまりにも弱弱しかった。

それはそうだろう。

なのはの体には、剣が刺さっているのだから。

刺さった部分からは血が滲み出し、真っ赤に体を染めていた。

なのはが力が抜けていき、魔法を行使できずに地面に向かって落ちていく。

フェイトはなのはを受け止めようと動こうとするが、その前に空がそれを受け止めた。

「なのはを離せえええ！」

フェイトが空に攻撃しようとするが、シグナムが立ちふさがる。

「シグナム！退いて！」

「それはできん。テストロッサ、貴様の魔力をもらうまではな」

「退いて……！」

悲愴な叫びを上げながら、フェイトがシグナムに襲いかかる。
だが、フェイトの攻撃は当たらない。
怒りで冷静さを欠いた状態で勝てるほど、シグナムは甘くはないのだ。

「なんで！？なんで当たらないの！？」

攻撃が当たらない苛立ちが、さらにフェイトの思考力を奪っていく。

なのはが死にそうなのに！
なのはが殺されそうなのに！
なんで当たらないの！

フェイトが勝負を急ぎ、大振りになったところをシグナムが的確に攻撃した。

その一撃がフェイトを地面にひれ伏せる。

（シャル、魔力を）
（わかってるわ）

なのはと同じように、フェイトの胸からシャルの腕がつきだす。
その手の中にはリンカーコアが握られ、光を失ったように小さくなっていく。

「なの……は」

最後になのはに呼び掛けるが、それを聞かぬままフェイトは気絶した。

空は、冷たくなったなのはを抱きかかえていた。

……あと、数分もすれば死ぬな。

ぼんやりとなのはを眺めながら判断する。抱いているなのはは危険な状態なのに、空は落ち付いていた。

それは自分が殺したからなのか、もしくは生き返らせることすら可能だからかは分からない。

ただ、死を眺めていた。

そういえば、前もこんな感じだった。

空の脳裏にさまざまな過去が浮かんでは消えていく。

ナイフを持った両親。

必死に抵抗する自分。

冷たくなった両親。

俺が殺した肉親。

狂ったように笑う自分。

……そうだった。

前に殺した時も空虚だった。
死の果てには何もなかった。

俺は――

「――また繰り返した」

人はどうして繰り返すのだろうか？
何故こんなにも愚かなんだろう？

結局、空は自分のエゴでなのは殺した。

戦いに身を投じる必要のない少女のエゴを否定するためだけに、
殺した。

――所詮、俺も人間か……。

人間に絶望しているのに、人の業から逃れることができなかった。
人間をやめたいと思っているのに、どうしてこんなにも人間なん
だろう？

どうして、こんなにも殺してしまうんだろう？

――何でこんなにも分かりあえないんだろう……？

なんで？どうして？……と空は問いかける。すべての始まり、根源に問いかける。

だが、根源は何も言ってはくれない。
返すのは沈黙のみ。

まるで——自分で探せと言っているような……。

自然と視線がなのはに戻る。

完全に冷たくなった少女は、穏やかに眠っていた。

そんな少女を見ると思ってしまう。生き返らせたい……と。

生き返らせることはできる。

真実の眼を使えば可能だろう。

しかし、それは自身の行動と矛盾している。
殺したのに生き返らせるなど、命を冒瀆しているとしか考えられない。

それでも、空はなのはの顔に手を置き唱えた。

——命の言葉を。根源へ導く呪文を。

— K o i τ ? ξ τ ε ? λ ε ? o i π ? ρ τ ε ? θ α ε
? ν α ι α ν η T r u s t ε λ π ? δ ε ? σ α ? θ α
γ ? ν ε ι π ρ α γ μ α τ ι κ ? τ η τ α ? λ α τ α α
ν o i χ τ ? λ ω τ o ? —

《すべてを視ろ さすれば扉は開かれん すべて
を信じろ さすれば望みは叶うだろう》

暖かい光。

光がなのはを包む。

空はなのはを地面にそつと置いた。

そして、予定通りシグナムのところに向かう。

「男の魔力は？」

「今蒐集しているところだ。それよりも、何故殺した？」

「……………」

「言いたくなければそれでいい。我々は主の足が治ればそれでいい」

「ああ。解散後、はやての家に帰ろう」

「うむ、了解した」

シグナム達が散る。

空も遅れて地面を蹴り、空中に飛び出していった。

振り返り、遠ざかっていく冷たくなった少女に目を向ける。

もちろんその少女は、目を覚ましているはずもなかった。

時空管理局本部。

ここで、今日の戦闘で瀕死の重傷を負ったのはとリンカーコア

を吸収されたフェイトとユーノ、クロノが収容されていた。

フェイト達はリンカーコアを蒐集されただけなので、特に問題はないのだが、なのはは未だ危険な状態で死亡してもおかしくないらしい。

なので、エイミー・アルフと検査の終わったフェイト達5人は、なのはの生還を願って待合室で待ち続けている。

「なのはちゃん、奇跡的に助かったそうよ!」

様子を聞きに行っていたリンディがそう告げると、安堵のため息がその場から漏れた。

あの出血量を考えれば誰だって死んだと思うのが普通だろう。

「なのはちゃん、本当に助かってよかったね!」

「……ああ」

エイミーがクロノを励ますように言うが、クロノの顔色は悪い。仲間が死にそうになったという恐怖が大きいのだろう。

だが、それよりもクロノが気になるのは『あの出血量は確実に死んでいた』のなのはが生きていることだった。

生きているのは嬉しいのだが、どうも引つかる。

「なのはちゃんは絶対安静、フェイトちゃんやクロノも戦えない。さて、どうしましょうか」

だが、リンディの一言ですぐに考えるのをやめた。
いまは、こちらを優先するべきなのだから。

「そうですね、向こうは5人。対して、こちらが動けるのはアルフだけ。あちらに動かれるとどうしようもない」

「最悪、他の人員が必要になるわね」

「はい、ですが人員を呼んでもあちらに勝てるか、と言われると難しくなってきますね」

こちらのエースである、なのはとフェイトが負けたのだ。

しかも、ヴォルケンリッターには被害が無い。

確実に、詳細不明のあの男の存在がすべてを狂わしていると考えていいだろう。

結界を難なく壊し、なのはを殺しかけるあの男は正直底が知れない。

「とにかく、動けない僕達に出来るのは調べることだけだ。今日はもう解散しよう」

「ええ、そうね。フェイトちゃんも休まないといけないし……」

「……うん」

リンディがフェイトに微笑みかける。

なのはの様子を見に行きたいようだが、フェイト自身の体力も回復していない。

しかも、一刻も早くフェイトには戦線に復帰して欲しい、リンデ

イの思いもわかるので頷いたのだ。

しばらくして解散になろうとしていた時、リンディの前にモニタ―が現れた。

「リンディ提督、高町なのは囑託員が目覚めました」

「えー!? 一週間は目を覚まさないと……」

「はい。ですが、実際に目を覚ましておられるので……」

「……わかりました。面会……できるわよね?」

「……………はい」

断れるはずもないだろう。

後ろでフェイトが嬉しそうに笑っているのを壊すほど、無情ではない。

後で報告書ものだな……と思いながら報告員は通信を切った。

「聞いていた通り、なのはちゃんのお見舞いに行くわ。クロノ達はどうします?」

「……僕はやめておくよ」

「僕も……」

俯きながらクロノとユーノが告げる。

何もできなかった自分が悔しいのだろう、そう思ったリンディは何も言わなかった。

「エイミィ……は行く気満々ね」
「はい」

こうして、四人はなのはの病室に向かうことになった。

「なのはちゃん、入るわよ」

なのはの病室に着いたリンディが、ドアをノックしながら尋ねる。
が、返事が無い。

「なのはちゃん？」
「……………」

やはり返事が無い。

疑問に感じ部屋に入ると、なのはは窓に向いて座っていた。
いつもなら、にやはははやられちゃった、と元気のある姿が見る影もない。

それほど、今のなのはは脆く、壊れてしまいそうな少女に見える。

「なのはちゃん、どうしたの？」
「……………」

なのはは、振り向かない。

窓の外の景色を見つめている。

まるで、自分達が存在していないかのように、外だけを見ている。

「な、なのは。お見舞いにきたよ」

だが、そんなことはお構いなしにフェイトが言う。

自分の存在を誇示するように。

だが、フェイトは後悔した。

自分の行動を。

なのはを呼び掛けたことを。

たとえ、それが時間を延ばした逃げだったとしても。

——それほどまでに、フェイトは絶望した。

「――あなた、誰？」

世界の時間が、時間が止まった気がした。

不意に声をかけられ、意識を戻す。
とりあえず、今はやるべきことをやるか。

「じゃあ、闇の書を貸してくれ」

「はい、頼みますね」

「わーってるよ」

手に取り、真実の眼で解析する。

解析してみると、結構破損していることが分かる。

防衛プログラムもそうだが、肝心のデータベース自体にまでバグが進行している。管理人格も役に立たない。

つまり、闇の書の元の姿——夜天の書——が載っていないのだ。

このままじゃ直せない。

「めんどいなあ」と思いながらも根源のデータベースにアクセスし、検索していく。

——と、あっさり夜天の書が見つかった。

手に持った闇の書の構成を弄り、夜天の書に戻す。

「ほい、終わった」

「え！？もうですか!?!」

シャルが驚きながらも本を受け取った。

驚くのは仕方ないだろう。

何故なら、空が闇の書を持っていた時間は一秒ほどで、闇の書の

外見も何も変わっていないのだから。

まあ、それだけ空の情報処理能力が高く、真実の眼を使いこなしている証拠だ。

「これで、はやての足は徐々に治る。今すぐ直して欲しいならできるけど……どうする?」

「そうですね……」

シャル達は顔を見合わせると、少し間をあけて言った。

「はやてちゃんも不審に思つかもですし、それに空君にはお世話になりっぱなしなので今回は遠慮しておきますね」

「シャル達がそれでいいならいいんだけど……ま、いつでも言うてくれればいいさ」

空自身にとって取引は成立し、シャル達が戦力になることが目的だったので、取引以上の事をしても問題はない。

さらに、空にとってははやて達との生活は予想以上に楽しいものだった。

シグナムとの鍛練、はやてとの料理、それと、なにより『家族』というものが実感できたことが。

『家族』というものに空自身、良いイメージはない。

それは、元の地球——死ぬ前の世界——での家族との生活に起因している。

空の家族は、一言で言うと最悪だった。

父は酒に溺れ、母は男と遊んでいた。

そんな状況でお金がある訳もなく、家には両親もいない空は何もない家で一人居ることが多かった。

学校にも行かず、一人で居る日々。

たまに両親が帰ってきてても、暴力がその身に襲いかかってくる。

毎日が退屈で、痛くて、苦しくて、悲しくて――

きつと、その時から絶望が始まっていたのだろう。

遠い過去を振り払いながら、空は今の『家族』の家へのドアに手をかけた。

「ただいんです、はやてちゃん」

「おかえり、シャル。もー、遅いから先に鍋始めようと思ったんやで」

「ごめんなさい、今から用意しますから待っていてくださいね」

シャルが慌てながら、用意をしていくのを見ながら再び思う。

――こんな生活もいいものだな……と。

人間は皆、嘘をついて生きている。

空が良心からはやてを助けたのではないこと然り（少しはある……はず）、シグナム達がはやてに蒐集を黙っていること然り……。そんな、画策から日常においてまで、人間は嘘について生きている。

なら、人は何故嘘をつくのか？

それは何かと争うためであり、何かを求めるためでもある。

そのために嘘をつく。

家族の前、友人の前、社会を前にして、偽った自分という嘘をついて生きている。

しかし、それは罪だろうか？

偽った自分がいなければ、場に溶け込めない。

素顔のままでは話は合わせられない。

嘘が無ければ国や民族、コミュニティというものは存在しないのだ。

なのに、誰が責められよう。

嘘をついたことに。

高町なのはが、皆の望む偽りの『なのは』であったことに……。

「な……のは……」

フェイトは、今の状況がはっきり飲み込めていなかった。

今聞いた言葉は空耳であり、嘘なのだと、脳が拒否しているのだ。それは、仕方ないのかもしれない。

フェイトには圧倒的に友達が少ない。

それに、心を許せる存在は、アルフとリンディ、なのはくらいだろう。

そのうちの一人である、なのはが自分のことを忘れたのだ。精神的ショックは計り知れない。

しかし、高町なのはは気付かない。

何故なら、今となっては他人なのだから。

「あのー、部屋間違えてませんか？　ここ209号室ですよ」

純粋な気持ちからくる言葉だからこそ、なのはの言葉が突き刺さる。

そして、自分をフェイト・T・ハラウンと認識していないことを理解する。

それは、決定打には申し分ない一撃だった。

「……ごめん……なさい……」

「フェイト！？　待って！」

涙があふれるのを感じながら、フェイトが病室を出ていく。

キョトンとしたのはを見て少し苛立ったが、それを抑え、エイミイはフェイトを追いかけた。

なのはとリンディだけの病室に静寂が訪れる。
だが、それも一瞬だった。

「なのはちゃん、本当に覚えてないの？」

静寂を破ったリンディが、質問というより確認の形で問いかける。

「あーその、覚えてません。というか、何を私は忘れたんですか？」

本当に分からないといった表情で、なのはが答える。
リンディも立ちくらみしそうになるが、それを抑え、更に問いかける。

「なのはちゃん、魔法使えるわよね？」

「……………はい？」

数秒間フリーズして、なのはが素っ頓狂な声を上げた。

魔法なんて知らないし、今の流れだと私が使えるような物言いだ。
おかしいことを言う女の人に若干引きながら、冗談めかしてなのはが答える。

「いえ、魔法なんて使える訳ないじゃないですか。それに、ここどこです？海鳴市じゃないようだけど……」

「あはは、ごめんなさい、変な事聞いたわね。ここは隣の陸鳴市よ。すぐ家に送るわ」

「はい、ありがとうございます」

リンディは適当に嘘をつきながらも内心焦っていた。

魔法のことを言えば何か思い出すかと思ったのだが、全く反応が無い。

フェイトと見ても反応なしとなると、手の打ちようが無くなっている。

なのはのご両親にどう説明しようか思案しながら、とりあえずリンディはなのはを家に戻すことに決めた。

家に戻っても魔法に関して思い出す可能性は低いが、気休めにはなるだろう。

「じゃあ、なのはちゃん。立てる？」

「はい」

聞いてから思ったが、なのはは重傷で動けない。

なのに、目の前のなのはは立っている。

その現実にもた立ちくらみを覚えたが、なんとか持ちこたえた。

「じゃ、じゃあ、行きましようか」

「あ、はい」

空・作者「では、また次回で」

ガンダムってカッコよくね？

「何やってんだよ、ジェイル」

「お、空かね。今から『あれ』の性能実験をするんだ、見ていくといい」

はやての足が治り始めて、四ヶ月。

この四ヶ月ではやての足は、歩けるようになるまでは回復した。

石田先生曰く「奇跡だ！」「らしい。

そんな訳で、この四ヶ月は戦いも何もない平和な日常が続いている。

もちろん、戦力増強と自己鍛錬は怠ってない。

その一例として、目の前に居るジェイルは俺の戦力に加わっている。

「おお！やつと『あれ』の完成か！」

「そうさ、君に『あれ』を教えてもらってから一ヶ月。ついにここまで漕ぎ着けたんだよ！」

「懐かしいな」

「ああ、あの映像は衝撃的だったよ」

そう、あの時、私は研究に行き詰っていた時だった。

「よー、ジェイル。あれ、元気ないな」

「ああ、いい案が思いつかなくてね」

「あれか？ナンバー0の武装に行き詰ってんのか？」

「強力な補助兵器を作ろうと思っっているんだが……良いものができないのだよ」

「ふむ」

「科学者としてあれだが、何かいい案はないかな、空」

「案……はある」

「本当かね！」

「ああ、一週間ほど時間を要するが……いいか？」

「それほど説明が難しいのかい？」

「いや、ジェイルにはあるアニメを見てもらう」

「あにめ？なんだいそれは？」

「見ればわかる、とにかくテレビを用意してくれ」

「ああ、分かった」

そして、私は一睡もせずとそのあにめを見続けたんだ。

「本当に空のを見せてくれた『ガンダム』には、興味が尽きないよ」
「ふっ、そう言ってくれると嬉しいぜ」

笑いながら親指を立てる。

「じゃあ、試験室にいこうか。ルルが待っていると思うからね」
「わかった」

試験室の扉を開け、中に入る。
そこには、見なれた一人の女の子が座っていた。

「よっ、ルル」
「お兄様！」

ルルと呼ばれた女の子が、勢いよく空に抱きつく。
しかし、空はその行動を読み切っていたのかあっさりと避けた。
となると、当然の如くルルは地面にぶつかる。
だが、痛みを感じさせない俊敏な動きで立ち上がった。

「何で避けるんですかつ！」

「え？だって痛いじゃん」

「私の方が痛いです！」

「それは自業自得だ」

「酷い！私はこんなにもお兄様のことを愛してるのに！」

「抱きつく以外の方法で愛してくれ」

「キスですか！お兄様はキスが御望みなのですね！」

「そうだな、ルルのうるさい口が消えるのが、最大の愛の表し方だな」

「分かりました、キスします！」

「なんで！？」

とまあ、今のやり取りで分かるように空とルルはかなり仲がいい。
理由はルルが生まれた時からよく遊んでいるからだと思う。

ルルは見た目こそ12歳程度だが、まだ生まれて3ヶ月程しか経ってない。

それはルルが戦闘機人だからだ。

ナンバー0『ルル』

ナンバー1『ウーノ』の後に生まれた戦闘機人だ。

コンセプトは、広範囲における高火力の単体戦闘を可能とした新しい戦闘機人。

そのために、『ガンダム』の兵器を参考に装備が作られている。

「相変わらずルルは元気だな」

「元気じゃないです！毎日模擬戦ばかりで……もっと遊びたいです！」

拗ねたように言うルルに苦笑する。

戦闘機人と言っても、機械じゃない。

なので、戦闘訓練などの経験がなければ能力を存分に発揮できないのである。

「まあ、管理局を潰したら遊んでやるよ」

「本当！？」

「ああ、だから今は訓練しような」

なだめる様に言いながら、頭をなでる。

なでているうちに、用意が整ったのかジェイルが『あれ』を連れてきた。

「それが。なかなかの再現具合だな」

吟味するように細部を見ながら、褒め称える。

褒められたのが嬉しいのか、科学者としての性なのか、またまたガンダムに魅せられたからなのか、ジェイルが説明し始めた。

「そうだろう、そうだろう！この大出力の大型ビームサーベルは何でも切り裂く！シールドバスタライフルは攻撃と防御を兼ね備えた優れモノだ！そして、この美しいX！サテライトシステムが使えんのは癪だが核エンジンでその問題も解決さ！これぞ科学と魔法のハイブリットだ！」

「うん、わかつてるからボリューム下げような」

「はっ！すまない、つい興奮してしまったよ」

まあ、今ので分かるように『あれ』とはガンダムXのことだ。
何故ガンダムXなのかは……作者の趣味だ。

「ふむ。大量生産は可能か？」

「それは難しいね。一つ一つ作っていくしかないよ。だが、大量生産する必要はないと思うがね。このガンダムXに負けはないよ」

「それは頼もしいな」

空は静かに佇むガンダムXを見つめていた。

5mと本家には劣るが人間よりは遥かに大きな体を持ち、遥かに大きな力を持つ、ガンダム。

そのガンダムが目の前に居る。

自分の手の届く所にある。

その現実に興奮し、喜びを感じていた。

そして、戦いたいと思う。

アニメの世界でしか存在しえないガンダムと。
人ならざるものと。

「ジェイル」

「なんだ？」

「俺に、模擬戦をやらせてくれ」

その言葉にジェイルが目を細くする。

「死ぬかも知れんよ」

「いいさ、ガンダムと殺り合えるなら」

その言葉に応じたように、ガンダムXの双目に明りが灯った。

「準備はいいかね？」

「ああ、いつでも行ける」

ガンダムXと相對しながら空が答える。
ガンダムXは、言語理解機能が付いているらし頷いた。

「じゃあ、ここを壊さない程度の攻撃にとどめてくれたまえ。では、始め！」

ジェイルの言葉と同時に空の手にロングソードが現れ、ガンダムXに振り下ろされる。

しかし、剣は届かずビームサーベルに防がれていた。

両者の剣からスパークが迸る。

「やるな、ガンダム！」

拮抗する二つの剣を睨みながら、空が叫んだ。
その叫びに呼応するようにガンダムの出力が増し、空も更に力を込める。

「この宝具『デュランダル』の攻撃を防ぐとはな！いや、むしろ賞賛すべきか！この聖剣に罅を入れようとは！」

聖剣『デュランダル』

切れ味の鋭さデュランダルに如くもの無しとローランが誇るほどの切れ味を見せる不滅の刃。

そのデュランダルに罅が入ったというのに、空の顔には焦りどころか笑みが浮かべられていた。

純粹に戦いを楽しむ笑み。

ガンダムに魅せられている笑みだ。

本格的に罅が入り始めた頃に、空が動いた。

「デュランダル!!」

真名を解放し、ビームサーベルごとガンダムXを吹き飛ばす。

それに畳み掛けるように剣を一線する。

白刃が交差し、衝撃と共に火花が散る。

斬りつけ、薙ぎ、防がれ、左右から来る敵の剣をいなし、再び斬撃をみまう。

剣戟はもはや何度重ねたのか分からぬほどだ。

しかし、攻勢は空にある。

真名を解放した勢いを殺さずに保っているのだ。

ガンダムXがビームライフルを取りだし、連射してくるが鋭角的に空が回避する。

そちらが射撃なら、と空もビームライフルを構成した。

螺旋を描く様に両者の間で砲撃戦が行われるが、被弾するといった愚は二人とも犯さない。

永遠に続きそうな光条の応戦が広がっていった。

「その程度じゃないだろうな、ガンダム——ッッ！」

空の挑発に乗ったのか、ガンダムXが急上昇し、空めがけて急速に接近してきた。

もちろん、ビームサーベルが振りかぶられている。

挑発した空に避ける道理はない。

刹那。

聖剣と光剣が交錯した。

一瞬の接触だったが、被害は目に見えるほど明らかだった。空のデュランダルがガンダムXの右足を斬り落としたのだ。

「わ、私のガンダムXがあゝ」とジェイルがなにか言っているが、空はここぞとばかりに攻撃する。

「ファンネル！！」

構成したのは大型のビームライフルだが、中にファンネルを積んでいるルルの専用武器。

ここで重要なのは、ファンネルは魔法で動かしているのでニュータイプじゃなくても動かせるという点だ。

よって、空は自在にファンネルを操り、光条を煌めかせる。

どこから来るかわからないビームを避ける術もなく、ガンダムXの両手両足が破砕された。

機体制御がままならないガンダムは落下し、地面に落ちる。所々から火花が散って、ダメージの重さを物語っていた。

半歩遅れて空も地面に降り立った。
そして、地面にひれ伏したガンダムXに言った。
満面の笑顔で。

「いい戦いだっただぜ！」

賞賛でも指摘でもない。

ただ、戦った相手を認めるだけの言葉。
そんな空の言葉を受け入れ、ガンダムは言う。

「こちらこそ、いい戦いだっただぜ！」

「……って、しゃべれんのかよ!？」

「？」

戦闘中に一回も話さないから話せないのかと思っていたが、よく考えてみれば言語理解できるのに話せない訳ねえ！

そんなことを考えていると、後ろから不穏な空気が漂っていることに気付き、振り向く。

「な、何かな？」

「空君」

「は、はい」

「ガンダムXの両手両足破損、ビームライフル破壊。どうしてくれるんだね」

修羅だ！

修羅が居る！

ジェイルの後ろに修羅が見える！

本能的な恐怖が空に襲いかかっていた。

その恐怖に耐えきれず空が叫んだ。

「え〜と、転移！」

「待ちたまえ！」

嗚呼、ガンダムとの戦闘楽しかったな。

現実逃避しながら空は鳴海市に転移した。

ガンダムってカッコよくね？（後書き）

空「何これ、ネタ？」

作者「ネタじゃないよ！」

空「でも、本編と関係ないじゃん」

作者「うっ」

空「本編、思いつかなかったのか」

作者「……はい」

空「ま、いいけどな。戦闘だったし、それほど間もあいてないし」

作者「結構まじめに書いたからなあ。チート能力者のまじめな戦闘って難しかった」

空「まあなあ、でもそんなチート能力使ってないじゃん」

作者「書いてる方としては難しいんだよ」

空「そんなもんかなあ」

作者「そんなもんなんだよ。あと、お気に入り登録100人突破ありがとー！」

空「ありがとうございます！」

作者「なんか要望とかくれれば書いてみるんでドンドンください！
くれた方が書きやすいかも……。てなわけで、感想ください！」

作者・空「そんな訳でこれからもこの作品をよろしく願いしま
す！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2194k/>

世界を視る眼

2010年10月15日23時50分発行